

〈2004年度全日本吹奏楽コンクール課題曲〉

福田洋介／「風之舞」管弦楽版 (2006)

〈市響60周年委嘱作品・初演〉

大塚茜／箏と管弦楽による協奏曲  
—手見奈伝説によせて—



箏・十七絃箏・歌：竹澤悦子

〈構想20年余、43歳にて完成した名作〉

ブラームス／交響曲 第1番 作品68

シューマンの妻クララへの気持ちは、恋愛か、尊敬か？ 続くコラールと「歡喜の歌」に似た旋律の意味は？



指揮：堺 武弥

指揮を秋山和慶氏、佐渡裕氏、小澤征爾氏に師事

管弦楽：市川交響楽団



平成22年12月5日(日) 午後2時開演  
市川市文化会館大ホール

## 本日のプログラム

福田洋介／「風之舞」管弦楽版(2006)

大塚茜／箏と管弦楽による協奏曲—手見奈伝説によせて—〈市響60周年委嘱作品・初演〉

\* \* \*

ブラームス／交響曲第1番 作品68

## 作曲者プロフィール

### 福田 洋介 (ふくだ・ようすけ)

幼少より音楽に愛着を持ちシンセサイザー等で遊び、11歳よりDTMシステムによる音楽作りを始める。現在まで作・編曲は独学。そして中学、高校と吹奏楽を続ける。

高校在学中に商業演劇の音楽を担当。その後演劇・舞踊・映画・TV・イベント等の音楽製作、サウンドシステムによる音楽・音響デザイン、吹奏楽・室内楽の作・編曲および指導・指揮に力を注ぐ。吹奏楽やアンサンブルのCDや楽譜を各社より出版。CD「ディズニー・オン・ブラス」(佐渡裕&シエナWO)、CD「ガーシュウィン&コーブランド」(金聖響&シエナWO)、CD「ウルトラマン・オン・ブラス」、テレビ朝日「題名のない音楽会21」などのアレンジャーとしても参加し、好評を博す。その他、学生団体・一般団体の常任・客演指揮も精力的に務めている。

#### ■代表作■

吹奏楽のための「風之舞」(第14回朝日作曲賞・2004年度AJBAコンクール課題曲)

KA-GU-RA for Band (JBA下谷賞・佳作)

シンフォニック・ダンス(航空自衛隊中部航空音楽隊委嘱)

マーチ「ブランニュー・デイ」(JBA下谷奨励賞・佳作)



<http://members.jcom.home.ne.jp/fukudayosuke/>



### 大塚 茜 (おおつか・あかね)

埼玉県出身。幼少よりピアノを始め、高等学校在学中Heavy Metalに傾倒。

2005年東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。

邦楽器、打楽器の作品を多く手がけており、光と陰とを繊細な技術で描き分ける作風と、楽器の個性を最大限に抽出しようとするその作曲態度は、演奏家達から絶大な信頼を得ている。委嘱作品も数多く、これまでに国内外で好評を博す。

2009年1月には自身初となる「大塚茜作品個展」を開催。

代表作は「Breathtical Metal」(3尺八)、「闇を切り拓く者たち」(箏、3尺八)、「いちじく」(三味線・唄、箏)、「全速力ウーマン」(Mar.、Pf) 他。

近年では舞台作品での仕事も増えており、「愛と青春の宝塚」「COCO」で編曲、「カゴツルベ」では作曲・編曲を手がけ、「薔薇とサムライ」「黒執事」では音楽助手を務めた。

またピアニストとして、ライブハウス・コンサートホール等での演奏活動のほか、他アーティストのサポート、舞台作品での稽古ピアノを務めるなど、幅広い活動を展開している。

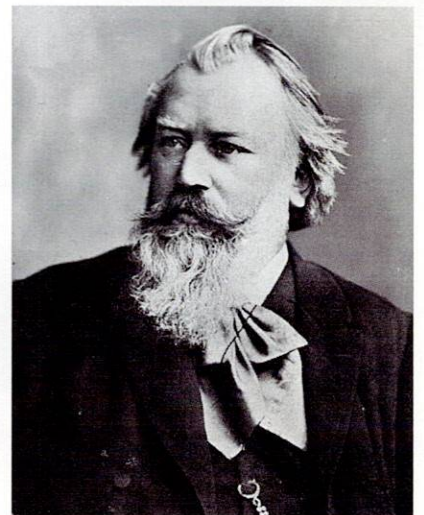
作曲を南弘明、北村昭、松下功、ピアノを角聖子の各氏に師事。

<http://otsukaakane.com>

## Johannes Brahms (ヨハネス・ブラームス)

1833年5月7日ドイツはハンブルグの生まれ。幼少より軍楽隊とオーケストラのコントラバス奏者であった父から音楽の手ほどきを受け、ヴァイオリン・チェロ・ホルンを習う。その後に酒場やレストランでのピアノ演奏で家計を助け、同時に作曲でも才能を発揮する。20歳のときシューマン家を訪問し、彼は自作などをシューマンとクララに弾いて聴かせた。これにシューマンは久しぶりに評論を書き、「新しい道」という表題で賞賛し、このことで一躍世に名が知れ渡る。また、ヴァイオリン奏者レマーニの伴奏者としてドイツの各地で演奏旅行を行い、ロマの民族音楽を教えられ、ブラームスはそれをハンガリーの民族舞曲と信じて採譜を続け、ピアノ連弾に編曲して出版した。これが有名な「ハンガリア舞曲」である。

主要作品には、4つの交響曲、2つのピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲、合唱と管弦楽のための『ドイツ・レクイエム』などがある。これらの作品は世界各地のオーケストラで、現在でも主要な演奏レパートリーとして取り上げられている。64歳で肝臓がんのため死去。



## 出演者プロフィール

### 箏・十七絃箏・歌：竹澤 悦子 (たけざわ・えつこ)

石川県七尾市に生まれ、8歳より生田流箏曲を学ぶ。沢井忠夫、沢井一恵、中井猛の各氏に師事。

東京芸術大学音楽学部卒業。

'87年 沢井忠夫合奏団CD「箏」(コロンビア)文化庁芸術作品賞。

'98 埼玉県芸術文化祭奨励賞を受賞。

'86年 箏グループ「どんぐり」を結成'93年引退まで20回以上の自主コンサート。

'89年より国立劇場主催公演に出演。

'93年 KOTO VORTEX を結成 箏アンサンブルの可能性を追求し、委嘱新作の発表、'94、'96年CD制作。

'94年 板橋文夫(p)ユニットに参加 '95年CD「游」発売。

'96年「独箏一ひとりごと」と題しソロシリーズを開始。

'99年オーストリアのシュタイアーマルク秋芸術祭にて、新作演劇(ウルリケ・オティンガー演出)の音楽を担当(音楽監督/田中悠美子)。

'02年音楽と映像のコラボレーションユニット「FUTONLOGIC」(おおたか静流他)を結成03年ロンドンICAにおいて日本人初のライブに成功。

'03、'04年金沢市民芸術村ミュージック工房主催、箏の可能性を探るコンサートシリーズ「コンタクト」を開催。

'05年「日本伝統音楽研究会」を率い、ドイツ各地を公演。

'07年川嶋哲郎(ts.)とデュオCDを発売。

'08年ポーランド・ポツナン市、ピエンナーレにてコンサート。

'09年1月、日本国際交流基金・アジアソサエティNYの主催によりN・Yにて毎年行われる世界最大の芸術見本市APAPIに出演、ヒューストン現代美術館にて公演。

4月クロノスカルテットのプロデュースによる、テリー・ライリー「IN C」カーネギーホール公演に出演。

'10年西空麗藝團主催、『邂逅』金沢公演にて 武元賀寿子(ダンス)と共演。ジャンルを超えたさまざまなアーティストとコラボレーションやライブ活

動、演奏を国内外にわたり展開している。古典から現代まで幅広くこなす演奏力には定評があり、声を伴う作品が特に注目されている。

そのほか福島大学、金城学院大学、有明教育芸術短期大学非常勤講師、沢井箏曲院師範として後進の指導にあたり、小中高の学校公演、ワークショップ等も多く教則本「ネオコトアカデミー初級」(音楽之友社)、「箏・初級」「中級」(楽音会出版)に執筆、作曲も行っている。



<http://www.l6.ocn.ne.jp/~et-koto/>

#### 演奏にあたって

昨年11月、市川在住の箏奏者・菅野税子さん主催の市川市木内邸でのコンサートにゲストで出演させていただいた時の事。コンサートを聴いてくださったコンサートミストレスの立田さんから「いつかご一緒できたら!」と、お声をかけていただきましたのが発端で、楽団60周年の節目の年にこのような大役をいただき、大変光栄に感じております。

箏という邦楽器とオーケストラの協奏曲は、まだまだ数も少なく選曲に悩んでいたところ、新進気鋭の作曲家・大塚さんから「チャンスがあれば是非書いてみたい!」とお話があり、本日の世界初演を迎えることとなりました。こうした数多くの「縁」が複雑に絡み合い大きな力となっていく不思議さ!

人でいうところの「還暦」を迎える市川交響楽団の益々のご発展を祈念し、またたくさんの関係者、スタッフ一同に感謝しつつ、精一杯今日の演奏を務めたいと思います。

### 指揮：堺 武弥 (さかい・たけや)



神奈川県横浜市出身。ドイツ国立ベルリン芸術大学にて研鑽を積む。

指揮を秋山和慶氏、佐渡裕氏、小澤征爾氏に師事。

2001年2月にオランダのアムステルダムコンセルトヘボウにてブラッテラント王立管弦楽団を指揮しデビュー。

これまでにブラッテラント王立管弦楽団(オランダ)、ル・デゥピュキューヌ管弦楽団(フランス)、リントハルト交響楽団(イタリア)、セゲト交響楽団(ハンガリー)、セ

ゲト歌劇場管弦楽団(ハンガリー)等で指揮をする。

国内外のオーケストラ、吹奏楽団の指揮をするほかに、全国で展開されている、自由参加型吹奏楽イベント『自由演奏会』での音楽指導や、吹奏楽関連のビデオ教材の収録、各地での指揮者講習会、吹奏楽コンクール審査員をはじめ、ヤマハ浜松吹奏楽団とのCD録音、同楽団のアメリカのシカゴで開催されたミッドウエストバンドクリニックへの出演への指揮などの他に、教育プログラムへの活動も行い、オランダでは、幼稚園、小学校、中学校のワークショップにも指揮者として参加、「幼稚園児のためのリズム講座」「幼稚園児とオーケストラの共演(幼稚園児は、ヴァイオリンと打楽器で参加)」「小学生と中学生の為のオーケストラ講座」に出演している。指揮棒メーカー PICKBOYの技術顧問。

また、オペラではハンガリーのセゲト市での活動の他、フィレンツェ市立歌劇場、他歌劇場での公演を行った。これまでに「椿姫」「リゴレット」「アイダ」「ホフマン物語」「ファウスト」「こうもり」「バラの騎士」「スベードの女王」「カルメン」「トスカ」「蝶々夫人」「3つのオレンジへの恋」「フィガロの結婚」「セヴィリヤの理髪師」「メリー・ウィドウ」「青ひげ公の城」等のオペラを公演している。

<http://takeya.waf.jp/>

### 管弦楽：市川交響楽団 (いちかわこうきょうがくだん)

今年創立60周年を迎えるアマチュアとしては全国有数の伝統を持つオーケストラ。

メンバーは現在100余名で年齢構成は20代から70代までの幅広い層にわたり、職業も会社員、教員、主婦など多彩。

地元市川市での演奏会を中心に全国各地での文化行事やオーケストラ・フェスティバル等にもしばしば招かれ演奏を披露している。また、著名な音楽家との共演も数多く経験しているほか、特に地元ゆかりの音楽家との共演にも力を注ぎ、地域の音楽芸術の振興に多大な貢献をしている。

市川交響楽団は市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラの各団体とで構成する市川交響楽団協会の中核として“クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらおう”をモットーに常に積極的な活動を展開している。

## 福田洋介/「風之舞」管弦楽版(2006)

かんばら ひとし

「風之舞」は2003年第14回朝日作曲賞受賞を受賞し、翌年全日本吹奏楽コンクールの課題曲Iに選ばれただけでなく、日本テレビ系列『1億人の大質問!? 笑ってコラえて!』の「日本列島吹奏楽の旅」で取り上げられる等、数多くの吹奏楽ファンから爆発的な人気を得た名曲です。

福田氏は以前から、“Hokusai Impressions”というテーマで作品を創り続けていて、その一連の作品として極めて完成度の高い作品です。氏は浮世絵について「想像力を掻き立てる浮世絵の持つパワー…彼らが残したものは、強烈な『日本のオリジナル』なのだと思います。鎖国下にあった江戸庶民文化の成せる業…という事ではなく、もともと日本人に『文化を築き上げる力』を持っているのだと思います。それが強烈に発揮された江戸期、私はタイムスリップしてでも体験してみたいものです。」と述べ、「尊敬する葛飾北斎の浮世絵にうかがえる『オリジナリティ』に、少しでも近づけたら…という、あまりに過大な目標を持ちながら…」とこの曲に掛ける意気込みを語っています。

以下、今回の市響による管弦楽版演奏に対してコメントを頂戴いたしましたので、ここに全文掲載させていただきます。

### 管弦楽版を作った経緯を少しご紹介いたします。

福田洋介

都立青山高等学校管弦楽部により2007年に初演、私・福田が客演指揮を務めました。当時現役だった高校3年生が中学3年生の時(2004年)、吹奏楽部出身の部員は吹奏楽コンクールで課題曲としてこの「風之舞」を取り上げており、思い出の曲だったようです。

しかし彼らは管弦楽部。オーケストラで拙作を取り上げることは楽譜がないから不可能なのです、という話を学生から聞き、「ならば一緒につくろうか!」と話に乗り、管弦楽版を新しく作ることを決めました。

吹奏楽と管弦楽で大きく違うのは楽器編成。吹奏楽の基本は3管編成ですが、管弦楽のスタンダードである2管編成にアイディアをシフトし、またサクソフォンやユーフォニウムという吹奏楽独自の楽器がありません。単純に楽器を置き換えるのではなく、まったく違ったアプローチのスコアを編み出す必要がありました。吹奏楽版はかなりシャープなサウンドに努めたのに対し、管弦楽版は豊富なサウンドになるようにしました。そして吹奏楽版にはない、ヴァイオリン・ソロの楽句を追加し、全曲の長さを変更しています。

○ちなみに、よく「それではこの管弦楽版が“原典版”なのか?」と訊かれますが、これは誤り。あくまで吹奏楽版が原曲であり、管弦楽版は自己的に拡大解釈した別版と申せます。

○吹奏楽曲を管弦楽版にした時に陥りやすい「弦セクがつまらない」ということを一番恐れていましたが、当時・弦セクの学生の皆に「この曲、演奏してて楽しかった!」と言ってくれたことが、とてもうれしかったですね。

○「風之舞」で表現してみたかったのは「(架空の)歌舞伎」。「勧進帳」「連獅子」「風之舞」「仮名手本忠臣蔵」…と演目が並んでいる想定です。「粋の世界」に誘えれば。

## 大塚茜/箏と管弦楽による協奏曲

—手児奈伝説によせて— 大塚茜

尊敬する先輩であり、日頃仲良くさせて頂いている竹澤悦子さんに、私の初めての箏協奏曲を演奏して頂けることになり本当に嬉しく思っております。

60周年の節目となる市川交響楽団にふさわしく、伝説の美女「手児奈」をモチーフにした曲ができれば、とのご希望を伺って手児奈ゆかりの地を散策してみました。現地を訪れ、何か靈感を得られれば、との期待からです。

手児奈霊神堂で散歩中のお爺さんがくつろいでいました。ランドセルの子供達が走り抜けて行きました。手児奈が入水したと言われている池も見ました。同じ敷地内にお稲荷さんもあったので少々びっくりしました。弘法寺の涙石も見ました。デート中らしき男女に階段を追い抜かされました。

お墓の宣伝ののぼりが沢山ありました。木々の剪定がチェーンソーでギューンギューン行われていました。万葉集にも歌われている真間の継橋は目に痛い程に赤かったです。

亀井院が見つからず、不安いっぱい歩いていたら  
女児「ねー、入る?」私「あ…入ります…」  
手児奈が使っていたという井戸がありました。  
女児「開けちゃだめだよ」私「うん…」 女児「一人で帰れる?」  
私「うん…大丈夫だと思う。ありがとう」

「手児奈」の何か、を感じたというより、その土地に生きている人達、生きてきた人達の方が印象深かった。「手児奈」の存在を千年以上のあいだ守りながら、それはあまりにも自然で、日常でした。そして、それこそを曲に表現したい、と思ったのです。

### 第一楽章

混沌の海から立ち顕れる「美」。

「足の音せず行かむ駒もが 葛飾の真間の継橋やまず通はむ」  
(東歌)

この世に与えられた「美」を、追いつめて失う。

### 第二楽章

「吾も見つ人にも告げむ 葛飾の真間の手児奈が奥津城処」  
(山部赤人)

その伝説の場所を、吾も見つ。人にも告げむ。

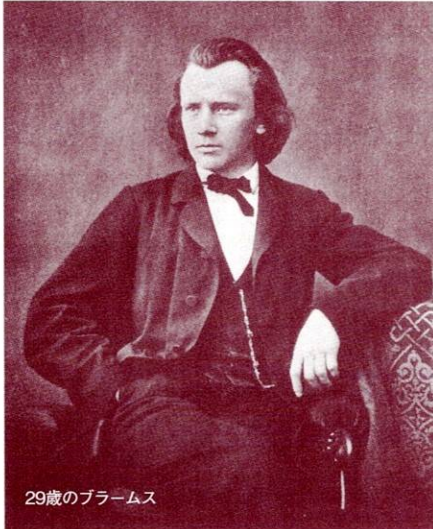
### 第三楽章

入水した女性を安産の神とする、人間のたくましさ。そこには生きる為の必然があり、力づくで全てが浄化され、昇華され、次の命と成る。

## ブラームス/交響曲第1番 作品68

かんばら ひとし

1876年10月、43歳のブラームスは交響曲第1番の初演を目前にして、完成した全曲をシューマンの未亡人クララにピアノ演奏で聴かせています。彼女は名ピアニスト兼作曲家でもありました。そしてクララは、その感想を日記に「私は悲しみ、打ちめされた(中略)それはきわめて才気に富んだ労作でした。」と書いています。



29歳のブラームス

変な表現だと思いませんか? みなさん。なんとなく意味がつながりづらい。「きわめて才気に富んだ労作」であるなら普通は「深く感動した」とか「ブラームスに共感を覚えた」とかであればわかるのですが、なぜクララは「打ちめされた」と書いたのか? 私はこの疑問を解決するため、この曲の成立をブラームスとクララ・シューマンとの関係を中心に年表的に整理することにしました。そしてこの言葉はクララの作曲家としての敗北宣言などでは決してなく、クララはこの交響曲の題材をブラームスの自分自身に対する想いの結論という極めて私小説的な仮説がうまれました。この考えをフィルターに曲全体を眺めると、1つの大きな起承転結が見えてきました。

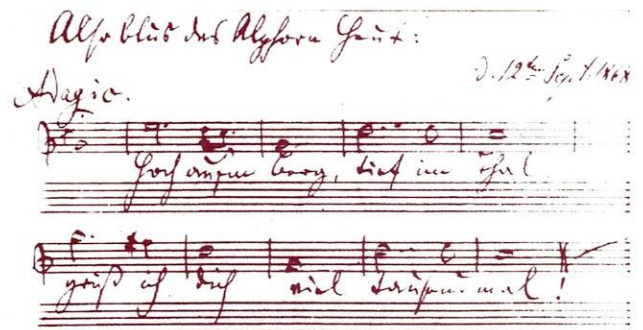
**第1楽章**は、この曲全体を象徴する苦悩に満ちたイントロで始まり、テンポの速い本編につながります。本編はベートーヴェンの『運命』のモチーフが使われる闘争的なものです。

ブラームスはアガター・フォン・シーボルトとの婚約破棄事件の後29歳の時にこの楽章の一応の完成をさせ、クララはそのピアノ試演を既に聴いていますが、その時このイントロはまだなく、第4楽章の作曲に伴って書き足されたものと思われます。このイントロを聴いたクララの心中はどのようなものだったのでしょうか。

**第2楽章**は気品ある甘い響きと、揺れる想いを全身で表したような3連符の後に現れるオーボエのソロフレーズは、ブラームスが21歳の時に滞在したシューマン家での安らかな日々を思わせませす。そしてそれは後半、寄り添うようなホルンと独奏ヴァイオリンが加わりさらに表情豊かに奏でられます。

ブラームスはしばしばクララとその子供たちをピクニック的小旅行にさそっていますが、そんなのかな中で楽しく遊ぶ様子をイメージさせるのが**第3楽章**です。中間部では大自然の中、おおはしゃぎの子供たちに「こらこら」と楽しそうに叱るブラームスの姿が目浮かびます。

そして一転、第1楽章冒頭の苦悩がよみがえったような重苦しい空気で**第4楽章**は始まります。「私のクララへの想いは尊敬なのか、それとも恋愛なのか?」ブラームスは倫理的に幾度もものがき苦しんだ末、ブラームスはクララを呼びます。それはブラームスが35歳の時、クララに誕生プレゼントとして贈った旋律です。



「高い山の頂で、深い谷で、心からのご挨拶を申し上げます」。このアルペン・ホルンのメロディに対し、クララは凜とフルートで答えます。そして続くコラールはブラームスがそこに聖なる女性を見たという告白なのではないかと私は考えます。これをきっかけにブラームスは『不名誉な噂話』を気にすることなく「クララ・クララ」と何度も大きな声で呼ぶ自由を得ています。だからブラームスはその歓びをベートーヴェンの第九の「歓喜の歌」に似せた旋律に乗せたのでしょう。これ以降この曲は、シンコペーションの多用、第1・第2両ヴァイオリンの頻繁な掛け合い、飛び上がって舞うような3連音符などの今までにないはしゃぎ様を見せ、そしてクライマックスにブラームスは全身全霊を込めてコラールを歌い上げます。

「もう君なしでは生きていられない。…私がいつもそしてずっと愛し続けられるように、どうか私を愛し続けてください。」とクララに手紙に書いた17歳年下の青年ブラームスが、この曲を完成する21年後の今まで自分との関係に深く悩んでいたことをクララはこの初演を聴いた後に知り「悲しみ、打ちめされた」のだと私は想像します。クララは晩年に娘に「私にとってブラームスは、夫の(自殺未遂)事件や(精神障害の)体調など、自分が最も精神的につらい時代に、若く充実していたであろう時期を献身的に尽くしてくれた最大の恩人である」と感謝を込めて言っていると伝えられています。( )内は筆者。

## 『真間の手児奈』

むかしむかしの、ずうっとむかしのことです。真間のあたりは、じめじめした低い土地で、しょうぶやアシがいっぱいにはえていました。そして、真間山のすぐ下まで海が入りこんでいて、その入江には、舟のつく港があったということです。

そのころは、このあたりの井戸水は塩けをふくんでいて、のみ水にすることができないので困っていました。ところが、たった一つだけ、「真間の井」とよばれる井戸からは、きれいな水がこんこんとわきだしていました。だから、この里に住んでいる人びとは、この井戸に水をくみに集まりましたので、井戸のまわりは、いつも、にぎやかな話し声や笑い声がしていたといいます。

この、水くみに集まる人びとの中で、特別に目立って美しい「手児奈」という娘がいました。手児奈は、青いえりのついた、麻のそまつな着物をきて、かみもとかさなければ、はき物もはかないのに、上品で、満月のようにかがやいた顔は、都の、どんなに着かざった姫よりも、清く、美しくみえました。

井戸に集まった娘たちは、水をくむのを待つ間に、そばの「鏡が池」に顔やすがたを写してみますが、その娘たちも、口をそろえて手児奈の美しさをほめました。

「手児奈が通る道のアシはね、手児奈のはだしや、白い手にきずがつかないようにと、葉を片方しか出さないということだよ。」

「そうだろう。心のないアシでさえ、手児奈を美しいと思うのだね。」

手児奈のうわさはつぎつぎと伝えられて、真間の台地におかれた国の役所にもひろまっていったのです。そして、里の若者だけでなく、国府の役人や、都からの旅人までやってきては、

「手児奈よ、どうかわたしの妻になってくれないか。美しい着物も、かみにかざる玉も思いのままじゃ。」

「いや、わしのむすこの嫁にきてくれ。」

「わたしなら、おまえをしあわせにしてあげられる。洗い物など、もう、おまえにはさせまい。」

「手児奈よ、わしとっしょに都で暮らそうぞ。」

などと、結婚をせまりました。そのようすは、夏の虫があかりをしたって集まるようだとか、舟が港に先をあら

そってはいってくるようだったということです。

手児奈は、どんな申し出もことわりました。そのために、手児奈のことを思っただけで病気になるものや、兄と弟がみにくいけんかを起こすものもありました。それを見た手児奈は、

「わたしの心は、いくらでも分けることはできます。でも、わたしの体は一つしかありません。もし、わたしがどなたかのお嫁さんになれば、ほかの人たちを不幸にしてしまうでしょう。ああ、わたしはどうしたらいいのでしょうか。」

といいながら、真間の井戸からあふれて流れる小川にそって、とぼとぼ川下へ向かって歩きました。手児奈のなみだも小川に落ちて流れていきました。

手児奈が真間の入江まできたとき、ちょうど真っ赤な夕日が海に落ちようとしていました。それを見て、

「どうせ長くもない一生です。わたしさえいなければ、けんかもなくなるでしょう。あの夕日のように、わたしも海へは行ってしましましょう。」

と、そのまま海へは行ってしまったのです。

追いかけてきた男たちは、

「ああ、わたしたちが手児奈を苦しめてしまった。もっと手児奈の気持ちを考えてあげればよかったのに。」

と思いましたが、もう、どうしようもありません。

翌日、浜にうちあげられた手児奈のなきがらを、かわいそうに思った里人は、井戸のそばに手厚くほうむりました。

真間の「手児奈霊堂」は、この手児奈をまつたもので、いまでは、安産の神さまとして、人びとがおまいりにいきます。

また、手児奈が水くみをしたという「真間の井」は、手児奈霊堂の道をへだてた向かいにある「亀井院」というお寺の庭に残っています。

本文は、和爾貴美子「真間の手児奈」(市川民話の会編『市川のむかし話』市川民話の会 1980)より転載。

もっともよく知られた形のお話です。

ご協力:市川市文学プラザ

〒272-0015千葉県市川市鬼高1丁目1番4号

市川市生涯学習センター(メディアパーク市川)3階

電話:047-320-3354 FAX:047-320-3352

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/bunpla/>

# 高橋虫麻呂が詠んだてこな

はんか  
反歌

葛飾の 真間の井見れば  
立ち平し 水汲ましけむ  
手児名し思ほゆ

(巻九 一八〇八番歌)

反歌

葛飾の真間の井を見ると、  
何度も通って 水を汲んだであろう  
手児名が偲ばれる。

# 山部赤人が詠んだてこな

反歌

我也見つ人にも告げむ  
葛飾の真間の手児名が  
奥つ城処

(巻三 四三三番歌)

反歌

私も確かに見た。人にも話そう。  
葛飾の真間の手児名の  
墓があつたというところを。

葛飾の真間の入江に

うちなびく玉藻刈りけむ  
手児名し思ほゆ

(巻三 四三三番歌)

葛飾の真間の入江に

なびいている玉藻を刈ったという  
手児名のことと思われる。

# 真間の井

「井」は水をくむ場所や、湧き水が溜まる場所のことを言います。

むかしの真間は入江があつたため、付近の水は塩分を多く含んでいましたが、国府台や須和田の台地の下から湧き出る「真間の井」だけは、きれいな清水があふれていました。

現在、亀井院(市川市真間四丁目)の裏庭にある井が、「真間の井」だとされています。

「真間の井」に満ちたわき水が、瓶からあふれ出すかの様子に、いつのころからか「瓶井」と呼ばれ、さらに真間の井から、霊亀が出てきたので、「亀井」と呼ばれるようになり、寺の名前になりました。

昭和のはじめから真間の開発が進み、真間の井の水位は低くなり始め、ひしゃくで井戸からじかに水を汲むことができなくなりました。その後、一九七四年に真間の井は修復され、現在の姿になりました。



手児奈霊神堂 1996年撮影



片葉の葦(手児奈霊神堂)



手児奈シンボルマーク  
2001年

ひらがなの「てこな」の文字で、手児奈の顔をかわいらしく表現しています。市川の文化事業のシンボルマークに使われています。牧野友明デザイン。



現在の真間の井(亀井院)

写真提供: 市川市文学プラザ

出典: 市川市文学プラザ企画展図録「てこな TEKONA」

# 「箏」という楽器について

箏(そう)は、日本の伝統楽器。弦楽器のツイター属に分類される。一般に「こと」と呼ばれ、「琴」の字を当てられるが、正しくは「箏」であり、「琴(きん)」は本来別の楽器である。最大の違いは、箏では柱(じ)と呼ばれる可動式の支柱で弦の音程を調節するのに対し、琴(きん)では柱が無いことである。箏を数える時は一面、二面(いちめん、にめん)と数える。

箏は、前後にアーチのかかった横に細長い板状で内部が中空の胴に、十三本の絃を渡して柱(じ)を用いて張り音程を調節し、奏者の右手に嵌めた爪(義甲)によって絃をはじいて音を出し演奏する楽器である。

## 絃(糸)

和楽器では普通絃とは呼ばず「糸」と称する。通常の箏は十三本の糸を有し、奈良時代より変わらないが、江戸時代には更に多絃の箏が作られたこともある。また明治時代以降、十七絃箏をはじめ、種々の多絃箏が作られている。十三本の糸には名称があり、演奏する側の反対側から一、二、三、四と数え、十以降の糸は斗(と)、為(い)、巾(きん)と呼ぶ。糸の構造は他の多くの和楽器糸と同じく、単糸を更に四本撚り合わせ、糊で固めたもの。材質は本来は絹製であるが、俗箏では現在はテトロン製が主流になっている。しかし、絹糸の独特の響きを気に入っている奏者も多く、特に擦り爪におけるシュツという音色は絹の方が良い。箏箏では今でも絹糸が主流である。近年において開発された箏を「新箏」と言う。宮城道雄の開発した十七絃箏がもっとも有名であり、既に一般化している。合奏で用いられるように特に低音部が良く鳴るように拡張されており、宮城以降の楽曲では広く用いられる。宮城道雄が開発した楽器はほかにも教育用普及楽器の短箏(たんごと)、試験的に作られた超大型楽器八十絃がある。

## 本日の出演者

<b>【コンサートマスター】</b>	佐分利 幸江	舟本 典彦	上村 啓介	時田 雄	<b>【トランペット】</b>
立田 祥子	滝澤 葉子	星 乗昭	神代 順子	半藤 嗣人	安藤 宣明
<b>【第1ヴァイオリン】</b>	時田 枝里子	若林 繁	小林 真弓	松村 由美子	田崎 真二
石崎 俊信	富田 八江子		花井 さと実	八木 良子	柳澤 武志
石本 恵理	仁井 理絵	<b>【チェロ】</b>	村上 信乃		
上田 佳津子	久田 しげ子	岩田 啓子	安永 裕	<b>【ファゴット】</b>	<b>【トロンボーン】</b>
大橋 一郎	溝田 範子	倉澤 倫子		菅原 斉	齊藤 翼
亀井 玲子	武藤 敦子	小松 高明	<b>【フルート】</b>	増子 恭一	坂田 圭
佐藤 薫	望月 聖仁	中村 公一	大坂 かおり	山内 静	吉川 昌憲
秦 一宜	吉岡 一郎	野中 能久	木村 眞諭紀		
堀 真理子		林 恭代	佐藤 洋行	<b>【ホルン】</b>	<b>【チューバ】</b>
森山 淳子	<b>【ピオラ】</b>	日澤 優		木下 泰斗	渡邊 鉄雅
二宮 伸雄	内田 綾美	福田 裕子	<b>【オーボエ】</b>	近藤 利昭	
武藤 真祐子	大橋 かおる	福原 耕二	二村 直子	潮見 恵子	<b>【打楽器】</b>
	佐々木 裕史	堀合 麻由美	本間 広樹	嶋村 恒夫	篠崎 美奈子
<b>【第2ヴァイオリン】</b>	鈴木 亜矢子			林田 朋子	都筑 裕
安藤 摂津子	高野 重樹	<b>【コントラバス】</b>	<b>【クラリネット】</b>	藤井 茂司	時田 裕
鎌田 真貴	奈良林 弘子	荒木 夏奈	井垣 貴嗣	山内 正晴	春田 美穂子
亀山 優子	原口 博司	池田 和正	一瀬 直美		和田 英恵

## 箏協奏曲スタッフ

**【音響】** 梶野泰範(ステージマインド) **【舞台】** 田中達也(田中和楽器店) **【衣装(特別協力)】** 時広真吾(リリック)